Force in Wonderland to Mircle

ふぇるみん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一章

友好条約が結ばれて数日が立った日のこと、突如中央に【ラヴェッジ】の建国が宣言された。果たして彼女の思惑は？ネプテューヌたちの対応は？

というわけでメガミラクルフォースサ終してしまったのが悔しいのでストーリー動画見ながら再構成。

リベンジともいう。

取り敢えず蓮だけは出します。

アニメ→メガミラクルフォース系列で進める予定。

目次

episode1 Start the Alice／Game 1

episode2 Exploring the Tower 4

episode3 Breaking the Sisters Heart 8

ｅｐｉｓｏｄｅｌ　Ｓｔａｒｔ　ｔｈｅ　Ａｌｉｃｅ／Ｇａｍｅ

某所　最上階

「・・・　以下四国は友好条約を結んだ模様です。」
「・・・　そう、いよいよ始まるのね。ならばこちらもそろそろ行動を起こしましょうか。Ｔ、タワーの状況は？」
「Ｒは予定通りに。ほか３つも何時でも稼働可能よ。」
「分かったわ・・・　これにて定例会合を終了とし、同時にここに【電子国家　ラヴェッジ】の樹立を宣言します。各員、明日より持ち場にて使命を果たされたし、以上。」
　暗い部屋の中、微かに見える光に照らされる９人の影。一人の声が告げられると同時に照明がつけられ、その全貌が明かされる。

「・・・　というわけでここからはオフレコ。」
「・・・　なかなか様になってますね。」
「まあ、さすがはもうひとりの女王というべきかな。」
「もう、もうひとりの私は違う私でしょ！」
　場の雰囲気が崩れた瞬間に全員がオフレコモードへと切り替わる。張り詰めていた場から一気に友人関係の場へと切り替わり険しい表情も一転、若干にやけている。
「・・・　何だ？我を呼んだか？」
「貴女も大概地獄耳ね・・・　リデル。」
「お前に表向きの統治は任せたんだ・・・　いついかなる時でも呼べば来るさ、我が女王アリスよ。」
　赤い髪をたなびかせてる少女・・・　アリスに愚痴を告げる。それに対し苦笑いで返す黒髪でアリスそっくりな少女・・・　リデル。
「相変わらずねふたりとも・・・　で、ガーディアンたちの様子はどうなのよ？」

「相変わらずの曲者だらけだよ・・・・ マーズとローズは戦闘狂だし、マーキュリーに至っては自意識過剰。常識人枠がジュピターとプルートの時点で胃が痛いわ・・・・。」
「・・・・ 各女王たちにディザスターの管理を任せたの・・・・・ 失敗だったかもね。」
そう呟くのは最初にいた7人のうちの一人、シュレディンガー。
自身が持っている椅子に座りかけながら顔をしかめているのでよほどのことだったらしい。
「ま、なるようになるでしょ。メビウス、各クラッカーたちに連絡を。・・・・・ わたしたちの歴史はここから始まるの!!」
「ええ、こんな私達でもやれると言うことを見せてあげましょう!!」
タワー上層階、そこに居た9人達による数奇な物語のノッチは、今引かれたのであった。

同時刻、革新の大地と呼ばれる国プラネテューヌにて、友好条約が先日結ばれた地、プラネタワー内部では極秘の会議が開かれていた。
『全員揃ったわね?』
「いつでもオッケーだよ!」
『大体言いたいことはみんな同じだと思うわ・・・・。』
『議題が同じならさっさと始めてしまいましょう。』
『ええ。イストワール、なにか知っているでしょ?アレ。』
そう画面上の人物に急かされプラネタワーの内部で画面にともに

映る人物・・・ イストワールはデジタル上に資料を展開した。
「さて、みなさんもご存知の通りつい先日、各国の中央に位置するように突如として新たに【ラヴェッジ】が建国されたのはご存知かと思います。こちらでも影響下を調べたところ、国境線沿いに未確認建造物であるタワーを確認しました。」
　イストワールはそのタワーの画像を全員に送る。３人ともほぼ似たりよったりな反応をしたあたり同じようなものがあったのだろうと推測する。
『奇遇ね・・・・ 私の国の国境線沿いにも全く同じものがあるわ。しかもかなり悪趣味な傷跡を残して。』
『どう言うこと？』
『タワー周辺のモンスターが異常なことになってるのよ。』
『・・・・ 詳しくその話を聞かせてください。』
『ええ、先日イストワールと同じように調査に向ったんだけどタワーの周囲にもともと生息していたスライヌやモンスターたちが人を襲わなくなったのよ。むしろ人懐っこくなったというか・・・・。』
『ええ・・・・ ？寧ろこっちは逆の反応ですよ？周囲のモンスターが全く活動しなくなったんですの。』
『こっちは凶暴化しまくって大変になってるわ・・・・ すでにいくらか被害も確認されてい・・・・ る。』
「うーん？私達のところはいつもどおりなモンスター達だったけどね。」
「タワーによっては周囲に与える影響が異なるのかもしれません。いずれにしろこの問題は早急に解決しないとなりません。」
　それぞれのタワーの影響下にあるモンスターたちの異常、それを認識した彼女たちは数日後に合流し合同探索することを決定した。この決定がどんなことを引き起こすか、それはまだ誰にもわからない。

Ｔｏ　ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・

ｅｐｉｓｏｄｅ２　Ｅｘｐｌｏｒｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｔｏｗｅｒ

翌日のこと。
報告を共有した４人は調査をするべく合流してプラネテューヌの外れにある建物へ赴いていた。ネプギア率いる候補生組もついてきており、上層部総出での探索をすることとなる。
「いい、ユニ？何かあったらすぐ言いなさいよ。ただでさえわからないことだらけだから。」
「ええ、ラムとロムも危険だと思ったらすぐに逃げなさい。」
「「分かったー！」」
各々が準備を済ませたところでいよいよ突入への足踏みが始まった。
「さて、どうやって入るんでしょう？」
「知らないわよ、ネプテューヌ、そこらへん調べてないの？」
「うーん、みんなが来る前にネプギアと二人で見渡したけどそれらしい入り口は一つだけだったね！」
「それがこの目の前の入り口ね・・・・。」
九人の前にそびえ立つ入口、あからさまに誘っている気しかしないが、国境線２そもそもこの建物自体あるのがおかしいためこれが正式な侵入方法なのだろうと察する。そして恐る恐る入口へと入っていった九人。
「うーん、やっぱりいつもどおりの魔物たちだね。けど、何体かこのあたりでは見かけない魔物たちもいるみたい。」
「新種のモンスター、ね。なにか悪い予感でも当たらないといいけど。」
ネプテューヌとノワールの呟きに対しハンマーで薙ぎ払いながら怒鳴っているブラン。
「それよりこいつら!!普通のモンスターより少し硬い上に強い！このタワーはやっぱりなにかあるわ!!」

「このタワーが魔物に対してバフのようなものをかけている、と認識したほうが良さそうですね・・・・。」
　ベールも槍をぶん回しながらその応答に答える。数十分もすれば道を塞いていたモンスターはキレイに居なくなりその先に扉が見えた。
「見た目はホッソイ割に中はだいぶ広いのね・・・・　認識阻害の術でもかけてあるのかしら？」
「えー国境線にあるんだし結構でかいとは思ってたけどねー。」
「とはいえ、この広さは異常ですわ。丸１０分２０分倒しても端に行き着く気配がありませんでしたし。」
　ブツブツとノワールとベールがあたりの敵を蹴散らしながら進んでいく。どうも塔の中の敵は数は少ないものの個体が強い、と言うわけでもなく特に問題もなかったのでずんずんと進んでいく。しばらくすると広い部屋に出た。
「ここは・・・・　広間、でしょうか？」
「なにかの罠かもしれないわ・・・・・。」
「でもそんなにそれらしき・・・・　お姉ちゃん！前を！」
　ネプギアが何かを見つけたのか正面を指差す。その声を聞いた全員もその真正面にある人影に目を凝らした。
「ほう、わざわざここを最初に登ってきたか、よほど胆力があると見える!!」
「っ!?誰！」
　ノワールは自然と太刀を取り出し臨戦態勢を整えていた。すると暗かった部屋に明かりが照らされ人影の全容を顕にする。赤い髪に特徴的な武装群。
「あんたは・・・・　一体・・・・・。」
「ほう、こちらから名乗ればいいのか、ではお言葉に甘えてそうさせてもらおう。私の名前は【マーズ】。女王の護衛でありこの赤の塔こと【エルフラム】の守護する者也。」
「エルフラム・・・・・　!?」
「どっちみち、アンタを倒さないとこの先には進めないってことで

しょ？」
「分かってるじゃあないか。」
　そう言うとマーズは刀を手に取り腰掛けていた椅子から立ち上がった。
「その実力が女王陛下と謁見するのに値するか……　全て見極めさせて貰おうぞ!!」
　その一言と共にマーズと女神達の戦闘が始まった……。

　別室にて
「…　あは、うちのマーズちゃん、始めたみたい♡」
「マーズは並大抵の実力者でも倒すことのできない超実力者よ…　それこそ、倒されたならローズでも勝てるか怪しいかもね？」
　最上階の別室で二人ポリポリとマーズの戦闘の様子を見ているのは塔の主であるローズと国の女王ことアリス。
「それにしても、最初にここに来るのは予想外だったわ。てっきり有効的なシャンディレを選んでくれるかと思ったのに。」
「良いじゃない、ボナちゃんやエリーを選ばなかっただけマシと思えば♡」
「それはそうだけど……。」
「まあ…　でもこんなところで落ちるようなら配下の災害たちでも十分かもね。」

「あの子達はできるだけ使いたくないわ。それこそ、あっちが女神化したならば別の話になるけど。」

二人の談笑はまだまだ続く。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ……

ｅｐｉｓｏｄｅ３　Ｂｒｅａｋｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｓｉｓｔｅｒｓ Ｈｅａｒｔ

戦闘が始まってから一体どれほどの時間が立ったのだろうか。長い間戦っていた女神と守護者はお互いに持っている獲物で交差しながらフロア内を縦横無尽に駆け巡る。一人で戦うマーズに対し８人で対抗する女神とその候補生たち。
「くははははっ!!己の力はそんなものなのか？もっと本気を見せてみろ!!これでは道化にもならぬ!!」

まだ余力が残っているであろうその発言にネプテューヌたちはキレたのか女神化し再び飛びかかる。
「私達にこれを切らせたのだもの、それに見合う戦いを所望するわ!!」
「そうだ!!それこそ我が求めた戦いだっ!!」
骸骨が飛び回りマーズを援護するのでそううまくは近づけない。だが、シスターズたちの射撃などの援護により穴はできる。
「はぁぁぁぁぁっ!!」
ネプテューヌもといパープルハートの浴びせた一閃が空を切る。
「ただ力任せの斬撃ではこの我は到底倒せんっ!!」
「読みが甘かったみてぇだな!くたばりやがれ!!!」
「何っ!?がぁっ!?」
かわしたと思っていたマーズだったが目の前が真っ暗になると思ったら次の瞬間背後から衝撃が襲った。それで彼は壁に打ち付けられたと悟った。
「はっ、流石に数の暴力には勝てないみたいだな!!」
「はっ、なるほど、数による連携と奇襲は流石といったところか。」
「ほざけ!!さぁ、この塔の作られた目的を教えろ!!」
マーズに突きつけられたのはホワイトハートが駆る大きな戦斧。だがマーズはそんな絶望的状況の中でも闘志を消してはいなかった。
「完全にとどめを刺さないのは愚者の選択だ、なぜまだ殺さない？」

「あなたには聞きたいことが山ほどあるわ。この塔の主、作られた目的、国が作られた理由、数えたらきりがないわ。」
「教えない、と言ったら？」
「一旦締め上げてから吐いてもらうことになるわね？」
　他の女神たちの獲物がマーズに向けられる。しかしマーズは嗤った。
「ははははっ!!!ここまで滑稽なのは初めてだ!!良かろう!!その勇気に免じて【ガーディアン】としての本気で戦わせてもらおう!!」
　ーーアハ！マーズ、そこまでよ。私の楽しみを奪ったら許さないんだからね！
「っ・・・・・　これは女王陛下、失礼いたしました。」
「っ、女王陛下、だと？」
　マーズから発せられた見覚えのない単語と突如としてフロア全体に響いた第三者の声。それは全員の警戒度を引き上げさせるには十分なものだった。その一瞬の隙を見逃すはずもなくマーズは一瞬にして部屋の奥へ移動した。一瞬にして包囲網を抜かれた女神たちは目を丸くしていたが、一人マーズはニヤけている。
「ここまでよくぞ我の攻撃を耐えたこと、素直に認めよう!!だがもう無駄だ!!我が女王陛下の前には全てが無駄なのだ!!凡人よ、平伏せよ!!我がエルフラムの女王、ローズ女王陛下の御膳である!!頭が高い!!控えろ!!」
　中央にうっすらと見える赤髪の女の姿を認めそっちに標的を変えた８人。女王陛下と呼ばれた赤髪の女は左手にライフルみたいなものを構えながら女王用に用意された椅子に座っていた。
「ここまで我が防衛者を追い詰めたこと、それは素直に褒めてあげる。」
「あなたが女王陛下・・・・・　こんな建物を立てた目的を言え！」
「そうですわ、こんな建物、大きすぎて領空侵犯どころか領土侵犯、しかも通行の邪魔ですし！」
「残念ながら私はその目的を言う術を持たないわよ？」
「なんですって？」

「私は四人の女王の中でも最弱よ？どうしてもと言うなら我が女王陛下直属の緑の女王に聞くといいわ。彼女ならこの塔が作られた目的、私のさらに上の存在がいる場所を教えてくれるわよ？」
「緑の女王？」
「ええ、確かなんて言ったかしら。リーンボックスの国境に配置された塔が彼女の居場所よ？」
「っ・・・・そんなのを教えてあなたになんのメリットが！」
　黙々と女神たちに情報を喋る女王と呼ばれた女に対し女神たちは次々と懐疑の目線と疑問を呈する。だがそれはマーズの睨みで止まった。
「丁度いいし、私達の目的を教えてあげるわ。私達は今感情についてのデータを集めているの。」
「感情についてのデータ？」
　ノワールもといブラックハートの疑問にローズが更に答えていく。
　曰く、彼女たちは女王と呼ばれる塔の女王のさらに上の存在と呼ばれる御方にデータを集積するよう頼まれ、各地に散らばったらしい。そしてその感情データは大きく４つに分けられ、喜怒哀楽の感情として集積するようになったらしい。
「そして、私は喜の感情。つまり喜びの感情について集積してるのよ。ちなみに緑の女王は怒りの感情、黄の女王は楽しみの感情、青の女王は哀しみの感情を集めているわ。」
「・・・・・つまり何が言いたいわけよ。」
「我が女王に謁見したいならば今後は強硬手段ではなくそれなりの見返りを持ってこいということだ。どうせここに来た目的は突如として現れた塔と設立を宣言された国の内情調査、そんなところだろう。」
「っ!?」
　一瞬で目的を見透かされた全員はマーズとやらに対する警戒度を引き上げた。パープルハート達も改めて武器を構え直す。が、意外にもローズが引き下がった。
「ふふ、今回は見逃してあげるわ。」
「からかっているのか!?」

「そう思いたいならご勝手に。ガーディアンよ、出口まで案内して差し上げなさい。」
「はっ、陛下。」
　そうしてマーズに釣れられ出口まで追いやられたパープルハートたちは渋々今回の調査を中止せざるを得なくなった。

「・・・・ 思ったより早かったですな。」
「まあ、いずれは来るとは思っていたけど。これはボナちゃんたちにも共有が必要かしらね？」
　一方、女王陣営も着々と撤退させたあとの共有もするのだった。
Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・・